

# パワーの奪い合いを超えよう

野田直人

国際協力機構がタンザニアで実施していたプロジェクトのリーダーを私が務めていた一九九九年に、貧困対策関連の調査団が日本から派遣され、マサイの人が暮らす集落のひとつ、メセラニ村でワークショップが行われた。

男女別のディスカッションで、女性たちが「パワーが欲しい」と発言した。その理由は「ウシを処分すればそのお金で水場を整えたりして生活が改善できる」であった。「水場が欲しい」というニーズではなく「パワーが欲しい」と表現した点が非常に興味深い。元来遊牧の民であったマサイのこと、この村で財産らしいものと言えはウシしかない。そしてウシのほとんどは伝統的に男性の所有物で、女性には所有権も処分権も認められていないからである。このケースではまさに当事者自身が「自分たちにはエンパワーメントが必要」と認識している。

それでは村の女性たちの考え方は、生活改善が目的で、エンパワーメントは手段、なのであるか。彼女らの発言を直線的な因果関係に還元すればそのような分析結果が出てきてしまうであろう。女性たちがウシの処分権を持つておらず、男性たちがウシを処分して生活改善に使うという意識を持つていない、という状況下においては確かにそのとおりかもしれない。では開発援助の意味は何であろうか。女性たちの考え方を尊重して、まず女性のエンパワーメントを図りウシに対する権利

を確立することであろうか。そのようなアプローチも考えられるが、この場合女性が権利を得ることはまさに男性の権利の喪失を意味することになるから、男性の抵抗は大きいと予想される。この条件下ではウシの権利をめぐって出口の見えないゼロサムゲームを繰り返す必要があるかもしれない。

しかしそこに他の選択肢が加われば条件は変化する。条件が変化すれば問題解決はもっと容易になる、いや、特定の問題を解決する必要性そのものを回避できるかもしれない。たとえばウシ以外の資源に女性たちがアクセスできるようになったらどうであろうか。マサイの村では男性にしかウシの処分権がない。では問題は、女性に処分権がないことであろうか。見方を変えればウシしか資源がないことが問題とも言える。そして他にも分析の仕方はあると思う。

私は開発援助の一番重要な役割は、機会を広げることと考えている。当事者たちが使える資源や選択肢が増えれば、ゼロサム状況は打破できる。新たな機会に気が付けば思考の枠組みも変化し、エンパワーメントや生活改善という変化が起きるきっかけや前提になるのではなからうか。

エンパワーメントを手段や目的としてではなく、動的な変化のプロセスそのものと捉えることはできないのであろうか。

(のだ なおと／有限会社人の森代表取締役)